

自動車関連製品特集号発刊にあたって

Publication of Special Issue on Automotive Products

専務取締役

谷口 敏克

T. TANIGUCHI



自動車部品と社会システム

2005年万博(愛・地球博)のテーマは「自然の叡智」である。そのテーマの意味するところは「持続可能な社会システムの創造や自然と調和したライフスタイルの提案など、地球と人類の輝かしい明日につなげる試み」とのことである。

自動車という道具も創造的社会システムの一つの要素でなければならないし、自然やライフスタイルと調和された存在でなければならない。尺度を変えて、自動車が社会システムを構成する一つのサブシステムとすれば、自動車関連部品も、もう一段小規模のサブシステムであり、親システムである車の中での調和が求められることは論を待たないであろう。さらに言えば、自動車関連部品も、上記万博のテーマが問い掛けている命題、すなわち「持続可能な社会システムの創造や自然と調和した……明日につなげる試み」から離れて存在することができない。

自動車関連部品を特集するにあたって、部品の社会システムとの調和について考えてみたい。

生体器官の平衡

何年も前、小職は胃切除の手術を受けた。患部を取り除いたのだから、切開、切除という人為的な傷が癒えれば直ぐにでも元の健康体に戻るものと期待して、傷の痛みを耐えて2週間ほどを過ごした。ところが、とんでもない経験をすることになった。突然、何とも形容しがたい倦怠感、激しい動悸、それに、おびただしい発汗が襲ってくるのである。ダンピング症状と言われるのだが、技術屋である本人からすれば、「胃」とはかけ離れた症状だけに予想もしていなかった。

故障した部品を除去すればシステムはもとに戻るものと信じていた技術屋の早とちりである。部品に設計変更を与えたのだから、システムの新たな平衡をチェックする必要がある。小職の身体でも、新たなシステム平衡状態への移行時間が必要

だったのだ。胃の変更に対して、胃自身の再生はもとより、他の臓器・器官のアジャストがなければ身体全体のシステムは再生しなかったのである。結局、ダンピング症状から開放されるのに何年も掛かった。本人は知らなくても、身体、生命体はちゃんと対処していたのである。正に「自然の叡智」である。

進化と調和

ハイブリッド車のアイディアは昔からあったと聞く。しかし、このシステムが社会に受け入れられるまでには、バッテリー、モータなどの個々の要素部品技術やシステム全体をマネージする制御技術の進化、発展があったことは勿論であるが、加えて、原油の逼迫や地球環境の危機といった背景からくるハイブリット車効用への社会通念の浸透が必要であったと思う。車を単に移動のための道具ととらえればハイブリット車も単なる風変わりな車で終わってしまうだろう。すなわちここでも、「持続可能な社会システムの創造や自然と調和した」発想が必要となる。

西洋医学は本質的に、症状の原因を追求しそこに治療(投薬や手術)を施す発想だと聞く。一方、東洋医学、とりわけ漢方の考え方は、症状を生体系平衡状態の結果としてとらえ、平衡環境を取り戻す(または、あらかじめ用意する)治療であるとのことである。いわば、進化を前提とした調和の医療なのである。前述の小職の経験からすれば、東洋医学の考え方の方が納得しやすい。ハイブリット車の提案も究極の無公害車を目指した進化と調和の漢方処方なのかも知れない。

自動車関連部品・システムも、原因対処型から脱却して、新たな自動車の価値、すなわち新しい社会システムを創造する、漢方的提案型の商品に変わらなければならないと思う。繰り返しになるが、自動車関連部品も「持続可能な社会システムの創造や自然と調和した」発想が必要となる。